

Homage

Professor Emeritus Terumi Nakano (1931-2022)

去る2022年3月2日、教育研究所所長であられた
中野 照海 名誉教授が逝去されました。

研究所といたしまして、ここに謹んで哀悼の意を表します。

Professor Emeritus Terumi Nakano, former director of IERS,
former Professor of Educational Technology and Audio-Visual Education,
passed away on March 2, 2022.

IERS expresses its condolences.

中野照海先生追悼

In Homage to Professor Terumi Nakano

立川 明 TACHIKAWA, Akira

●元教育研究所所員

Former Member of Institute for Educational Research and Service

我らが敬愛する中野照海名誉教授（以下中野先生と表記する）は、2022年の3月2日、満90歳で昇天された。こうした悲しい場に相応しからぬかも知れないが、まず中野先生の追悼文を草するに相応しかった方々について述べたい。かつての教育学大学院は、教育哲学、心理学、視聴覚教育の三分野から構成され、中野先生が所属された視聴覚教育には、年齢および経歴面で先生と大きく重複した、阿久津喜弘（1932-2006）および石本菅生（1935-2000）の両教授が居られた。特に石本教授はインデアナ大学で中野先生を追って学位を取得され、学内のみならず、学会の事務局長（石本）と会長（中野）等の役割で、40年もの間、極めて近い道を歩まれた。しかし、お二人は10数年以上も前に他界されてしまった。教育哲学のベンジャミン・C・デューク教授（比較教育）も、お二人に劣らず、中野先生の追悼文を書くに相応しい立場におられる。共に1931年生まれのデュークおよび中野の両先生は、同じ視聴覚教育（Audio-visual Education）の専任講師として1959年に任用された。しかも合衆国の大学院でデューク教授を指導する立場にあったのは、初期の中野先生の一大関心事、教育への映画の活用研究の権威であった。デューク教授は、アジアでの教育メディア現状調査を経て、数年後に比較教育へと専門を変えられたが、前述のような背景の上に、お二人の友情は30数年も続いた。しかし、デューク教授が退職後ペンシルヴァニア州へ戻られて既に久しい。

かくして教育史の不肖私が、役割をお引き受けすることとなった。まずは中野先生の研究教育面のご貢献の理解で、上記の方々の足元にも及ばな

いことお断りしておきたい。以下では、学内での教育研究活動の合間に私が見聞きした中野先生のお人柄を中心に、綴らせて頂く。やや公的なエピソードから始め、個人的な思い出に及ぶことをお許し願いたい。互いに20年近くを隔ててであるが、中野先生と私とは、共に大学院の副部長および部長とを務めた。この間の私の一番の思い出は、退職された直後の夏期卒業式において、先生に名誉教授の称号が授与された際、紹介の任を果たしたことである。不覚にもこの時まで私は、中野先生の著作のうちで二つに目を通していただけであった。学部学生時代の1970年、NHKの「日本賞」のアルバイトを幹旋下された際に頂いた『教育のシステム化と放送教育』（明治図書新書）と、私の着任直後の1979年に恵贈下された『教育学講座 6 教育工学』（中野先生編集、学習研究社）とに、それぞれ所収された二論文であった。この経験から私は、教育工学の主要な課題は放送教育の何たるかを定め、またテクノロジーと学校教育の正確な連関とを確立することであろう、と一方的に思い込んでいた。こうした内容だけではやや抽象的と感じ、少しくユニークな紹介内容に纏めようと、先生が退職に前後して出版され、同じく恵贈頂いた『教育メディアとともに』（日本視聴覚教育協会）および『先生と友人と書物に恵まれて』をまず拝読した。ところがそこには、B. F. Skinner はともかく、David Ausubelを始め何名もの（私には不得手な）心理学者が言及されて居てやや気後れさせられ、同時に、教育工学に関する古い予断も覆される結果となった。にもかかわらず他方、この間の教育工学の発展の意義と課題についての中野先生の解説が、ウィットに富むと共

に、専門外の者にも極めて分かりやすい、との印象も強くした。そこで紹介では、専門分野でのご貢献については簡略化し、優れたエッセイストとしての先生の特質を強調させて頂いたのである。この紹介に壇上の中野先生は、やや困惑気味の照れ笑いで応えて下さったことを、今でも懐かしく思い出す。

引き込まれて読んだエッセイには、興味深い内容がいくつも含まれていた。一つは、過去の数十年に生じた教育メディアのパラダイムの変遷と、他分野も含む研究活動一般との関係について、中野先生から与えられた示唆であった。何より驚いたのは、放送教育、マルチ・メディア、ハイパー・メディア等における人と情報間の作用の諸特質が、例えば歴史学の研究遂行上の手続きと対応していたこと、特に、歴史上の出来事の時系列を軸としつつも、異種の出来事や理論間の新たな統合を、時間を大胆に前後しつつ試みるという、オリジナルな歴史研究の場合での手続きの諸特質と、見事に対応していた点であった。教育工学と大学史の距離を一気に縮めて頂いた思いであった。

また特別に目を引いたのは、海外の著名な研究者の中で、合衆国のウィルバー・シュラム (Wilbur Schramm: 1907-1897) への先生の言及であった。(マス・) コミュニケーション論の開拓者であったシュラムは、早くからフルートの演奏に長け、ハーヴァードとアイオワの大学院では文学を専攻したという。それを知って、文学・音楽好きで、教育工学の最先端を追及された中野先生との共通点に関心を持った。共に大の野球好きであったともいうが、これはやや偶然であろう。ところが生涯のお仕事に関しては、偶然はもはや通用しない。アジアやアフリカを含む開発途上国でのマス・コミュニケーションと教育や経済発展の実践的な研究は、誰もが認めるように、シュラムの偉大な業績であった。直ちに思いつくのは、教育工学を背景とした中野先生が、トルコやチェunia、ホンジュラスを中心に、途上国での社会教育の改善に心血を注がれたことである。私は寡聞にして、中野先生以上にそうした方面での貢献を成し遂げた

日本の大学人を他に知らない。研究者として、誰よりもICUの設立理念にもふさわしい仕事をされたのである。ご本人がお認めになるか自信はないが、生涯にわたるそうした実践的研究者のモデルを、シュラムに定められていたのでは、と私は思う。

第三に、先生が人を見定める際の決定打として、嗜好品としての酒が頻出したことがある。まず驚いたのが、インディアナ大学でノールトン教授に指導を仰ぐことと決定した喜びの理由で、何より同教授が「大変な酒豪で…パイプのタバコを好まれ、音楽好き」だったことだったという。またある時ファースト・クラスの機中で同席し、その仕事ぶりから実業家としての土性骨の強さに先生が敬服されたアメリカ人も、常人の二倍の酒の飲み手であったとのこと。さらには、自己の研究時間を実に厳しく統制したB.F. スキナーが、夜間には必ずウォッカを嗜んだことの紹介も、忘れられていなかった。かくいう私にとっても、酒は中野先生との重要な接点であった。先生と二人で飲み歩きした記憶はないが、しかし各種の会合でしばしば隣席させて頂いた理由の一つは、共に酒好きだったからであると思う。加えて中野先生は何度か、リキュールを始め好みの酒を、紹介して(文字通り)「下さった。」私の退職時には、労いの言葉と共に、トルコの酒ラクをカートンでお贈り頂いたことを、何よりの思い出としてしばしば振り返っている。

しかし、酒以外にも実に多くの恩義を受けた。中野先生のご関心の広さの結果であったと思うが、大学内外で発表した拙文に対して、しばしば独自の感想を寄せて下さった。例えば、私が着任早々に行なうこととなった入学記念公演で、中世大学の起源を論じた際にも、ただ一人、アリストテレスの属性論について質問を下さり、この方面での研究を続けるように、との励ましを忝くした。また川端の『伊豆の踊子』の二つの映画版を比較した私の最終講義については、その際の小冊子を大幅に改定の上、出版するよう強く勧めて下さった。その経緯は、拙著『『伊豆の踊子』を読む』(川島書店)の「あとがき」で触れた通りである。

私にとって中野先生は、数多いICU関係者の中にあって、ただ一人、叔父か兄を強く感じさせる方であった。共に酒好きでも、二人して飲みに行かなかった理由はそこにあったと思う。それであったからこそ却って、自身の退職にあたって、私はこれまで誰にも明かさなかった **personal history** を、中野先生ただ一人には素直にお伝えした。やや大袈裟であるが、人へ向かって何事かを告白すれば、その相手方がご存命の間は、二度とお会いできないとの覚悟を伴う、と初めて実感した。ご退職の何年か後から、中野先生が近隣の立川市にお住まいと知りつつ、お目にかからなかった不義理を、今は心からお詫びしたく思う。しかし、今度何処かでお目にかかることがあったとしても、もう一人の自分自身との再会の如くで、先生からいかなる言葉もかけて頂く自信がありません。その時は先生の照れ笑いのお姿を拝見し、挨拶だけで通すことをどうかお許し下さい。

中野先生のみ魂の天国で安らかならんことを、心からお祈り申し上げます。